
デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

ゼクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

【NNコード】

N1367Z

【作者名】

ゼクセル

【あらすじ】

ある事件で1人になった闇斗。そこへ黒いデジヴァイスが降ってきた。そして、闇斗はそこから新しい人生がはじまるのだった。これは原作にオリジナルを積極的に入れていく小説なので話の内容がガタガタになるかもしれないのとそこはご了承ください。

プロローグ（前書き）

『デジモンアドベンチャー』の小説初投稿です。よろしくお願いします。

プロローグ

1995年のある日、突然俺は1人になってしまった。原因はさつきのオレンジ色の恐竜と緑色の怪鳥との激突。奴らの戦いで近くにあつた俺の家がオレンジ色の恐竜に潰されてしまった。両親の安否を確認するため家へと向かった。がれきの下から父と母らしき手がそれぞれ1つずつでていたので引つ張った。しかし、出てきたのは父と母の腕だけだった。そのとき、俺の父と母が死んだのを悟った。俺はその事実に号泣した。

あの事件の次の日、だから俺はこうして1人さまよっていた。どこにも行くあてがないから。親戚は「金がない」だの「部屋がない」だの建て前の理由を言って俺を追い返した。他の家も同じだった。さまよつているうちに人間の汚さやあのオレンジ色の恐竜への恨みや憎しみがこみ上がってきた。

「絶対に復讐してやる！」

そう言つたら、空から何か降ってきた。幸い周りには人がいなかつた。降ってきたものを拾い上げてみると、それは黒いポケベルみたいで真ん中には画面が付いていた。そして、それは突然黒く輝き出し俺は空へと吸い込まれていった。そこで、俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

新参者なのでいろいろ意見をくれるとありがたいです。

主人公紹介（前書き）

闇斗のプロフィールです。

主人公紹介

暗崎
あんざき

闇斗
やみと

身長 126cm

体重 28kg

年齢 7歳

誕生日 8月10日

性別 男

性格 群れるのが嫌い

冷静

無口

孤独が好き

好きなもの

- ・蕎麦
- ・サバイバル
- ・バナナ

嫌いなもの

- ・甘いもの
- ・苦いもの
- ・甘つたれる奴
- ・命を大事にしない者

今作の主人公。 我が道を行く1匹狼。 3歳のデジモン事件以降心に負の感情をいだくようになる。 それがきっかけで「闇の選ばれし子

供」に選ばれてデジタルワールドに行く。デジタルワールドに行つてからは闇の力を使役することができる。自分が「闇」であることを誇りとしているが命を大事にしない者を味方とは思わない。利用できる者は最大限に利用しようとする。そして闇斗のデジヴァイスは限定の能力がいくつかある。

主人公紹介（後書き）

闇斗のデジヴァイスの能力はネタバレになるのでまだ言えません。

ダークネス進化（前書き）

話がガタガタです。すみません。

ダークネス進化

side 間斗

……俺を誰かが呼んでいる。誰だらうへ俺は目を開けてみた。すると、変な生き物がこっちを見て、呼んでくる。ああ、夢か…。そうおもい、俺はまた目を閉じた。

ガブツ

俺が目を閉じるとその変な生き物は耳をかんできた。

「いってえええ！？」

俺はいきなりきた痛みに驚いて跳ね起きた。

「痛えな。何するんだよお前。」

？「だつてまたねよつとしてたもん。」

「や」は悪かつた。わつきから俺を呼んでつけど何の用だ？

変な生き物にまたねようとしたことを謝つてなんで俺を呼んでたのか聞いた。

？「まあ血口紹介だね。まくはロロモン。まくは君を待つてたんだ。

」

「俺…を?なんで?」ロロモンとこう生き物がそつ言つてきたのでなぜか聞いた。

ロロモン「その黒いデジヴァイスを持つ子がくるのを待っていたん

だ。ぼくはそのパートナー「デジモン」だから。「

…いま分からぬことだらけだったぞ。

「待て、『デジヴァイス』とか『デジモン』ってなんだ？」

俺はそうきいてみた。

「10分後~

「なるほど、お前らは『デジタルモンスター』通称『デジモン』と言われる生き物で『デジヴァイス』はこの世界で大切なもののなんだな。それを守るのがパートナー『デジモン』と言われる『デジモン』なんだな。」

約10分間の説明でだいたい納得できた。…え?なぜそんなにすんなりと納得できたか?最近は変なことつづきだからな。これくらいありじやねと思ったから。

「説明ありがとよ。じゃーな。」

俺は後ろを振り向いて歩いてこいつとした。

コロモン「えええ!…どうして?」

「俺には守りなんぞ必要ない。一人で好きにやるのが一番なんだよ。」

「

そう言つて立ち去りうつしたら、

ギィヤアアアア

その声とともに赤い恐竜がきた。

「な、なんだ!…あれは!…」

「クロモン」「ティラノモンだ！」

ティラノモンは俺に突進してきた。

「ぐつ…」

突進をかわうじてかわすもティラノモンはすぐに振り向いて炎を吐いてきた。これには反応できず死ぬ覚悟をした。しかし、俺は死ななかつた。なぜならその炎をかわりにあいつが受けてくれたからだ。

「お前！？　どうして、どうして俺の身代わりなんかに…」

「クロモン」「だつて守らなくちゃいけないもん。だからだ…よ。」

俺が聞くとあいつは弱々しく答えた。ティラノモンはまた突進をしてきた。そのとき、俺の心が「ティラノモンに向かって手をかせ」と言つてきた気がした。その通りに、俺は突進してくるティラノモンに手をかざす。すると、漆黒なオーラが出てきて、ティラノモンの突進を止めた。

「おー、お前。どういった理由か知らんが俺のパートナー『デジモン』に手をだしたのは許さねえ。」

その言葉でティラノモンを威圧し、漆黒のオーラで後ろに倒した。

「「クロモン、いくぞ。さっさと戻っていた進化だ。」

俺がそう叫ぶとクロモンは黒い光に包まれた。

「ロモン ダークネス進化！……………ブラックアグモン！」

「ロモンがブラックアグモンに進化した。しかし、明らかに体のサイズが違った。ブラックアグモンじゃ勝てないとthought。

「ブラックアグモン！俺がやるから退け！」

俺がそう言つが

「ブラック「大丈夫だよ。そこで見てて。」

ブラックアグモンがティラノモンに向かっていった。すると、ブラックアグモンはその体から想像できないほどのスピードでティラノモンを圧倒する。そして、

「ブラック「ベビーフレイム」

ブラックアグモンが黒い小さな火の玉を吐いた。ティラノモンは有り得ないくらいに吹き飛んだ。そして、ボロボロになつて逃げていった。

「…凄いな、ブラックアグモン。」

「ブラック「名前長いからブラックでいいよ。」

「そりゃ。」

そんな会話をするとある疑問が浮かんだ。

「それにしてもなんであんなに体のサイズが違ったのにかてたんだ？」

？「それはお前の持つ闇の力とブラックデジヴァイスによるものだ。

俺が疑問をもらすとそれに答えるよつてヴァンパイアみたいなデジモンが突然現れた。

「

ダークネス進化（後書き）

ダークネス進化は普通の進化との相違点がいくつもあります。意見、感想お待ちしています。

カムバートモン（前書き）

今回は説明だけです。ストーリーは全く進みません。

ヴァンパイア

突然姿を現れたヴァンパイアみたいなデジモン。

「なんだ？お前は？」

？「私の名はヴァンパイアモン。君と同じ闇を愛する者だ。」

俺が聞くとヴァンパイアモンと言われるデジモンはそう言った。
ブラック「ヴァンパイアモン！？確かに最近力を上げている「ナイトメア
ソルジャーーズ」のリーダーだよ。なんでこんな所に？」

ブラックがヴァンパイアモンについて説明した。だが、いまいち納得いかないところがあるなあ。

「そういうえばさつき「闇の力」とか「ブラックデジヴァイス」とか
言ってたけど全く意味が分からぬが…」

ヴァンパイアモン「教えてやつてもいいが一つ条件がある。」

ヴァンパイアモンは俺が質問するとそう切り返してきた。

「…なんだ？」

ヴァンパイアモン「私の仲間になれ。」

俺が聞いたらヴァンパイアモンは仲間にになれと言つてきた。

「……じゃあまず俺の質問に答えてもらひ。仲間になる件はその後だ。」

俺は仲間になるつもりはないがいろいろ情報を聞けるかもしねりない。といふことでこんな風に言つた。

ヴァンデモン「…いいだろう。まずは何から聞きたい?」

するとヴァンデモンは俺の要求に応じてくれた。

「まずは闇の力についてだ。闇の力にはどういう能力があり、使用者にどんな効果を与える?」

ヴァンデモン「闇の力にはいろいろな能力がある。例えば、先ほど貴様がティラノモンに使つたように盾にしたり、相手に球状にしてぶつけることができる。そして、使用者に与えられる能力についてだが知力、体力などの上昇だ。だから貴様は3歳にも関わらず大人っぽいしゃべり方や難しい言葉が分かるのだよ。」

なるほどな。だからこんなに流暢にしゃべれるのか。さつきのティラノモンの件についても納得がいくな。

「じゃあ次はブラックデジヴァイスについてだ。」

ヴァンデモン「ブラックデジヴァイスは普通の神聖なるものとちがつて暗黒なものだ。闇に反応し、闇と共に鳴ることで普通の進化と異なる進化「ダークネス進化」ができる。ダークネス進化で進化したデジモンは必ずウイルス種になり、通常とは違う異質な能力も備わるようになる。貴様のパートナーデジモンのブラックアグモンで

「 いえ、高速移動のことだ。弱い成熟期のデジモンなら簡単に倒せるだろうな。」

「 これも納得がいくな。ブラックがティラノモンのときにみせた高速移動についても成長期にも関わらず成熟期を倒したこと理解できた。ヴァンデモンの情報は信憑性があるな。」

「 もう一つ聞く。お前の組織は何のためにある?」

ヴァンデモン「私の組織は光と闇が混ざり合った世界を作り出すためといろんなものへの復讐だ。」

「 その中に人間は?」

ヴァンデモン「もちろん入っている。」

利害が一致するな。これを利用しない手はないな。

「 いいだろう。仲間としてではなく手を組むだけだ。そこを間違えるなよ。」

ヴァンデモン「や」のパートナーデジモンは?」

ブラック「僕は闘に元気へでもつこう。」

ヴァンデモン「よからず。では私の城へ行く。ついてこい。」

城とか持つてるのはかよ。ヴァンデモンの城へ向かう俺とブラックだつた。

ヴァンパイア（後書き）

意見、感想お待ちしております。

交渉（前書き）

すみません。話がガタガタかもしだれません。

俺らはヴァンデモンについていき、城にたどり着いた。

「随分と趣味の悪い城だな。」

ヴァンデモン「よくそれを城の主人の前で言えるな。まあ、中に入るといい。」

ヴァンデモンはその後城の正門を開け、俺らを中へ入れてくれた。中も想像通り趣味が悪い。まあ、言わなかつたが。

? 「ヴ、ヴァンデモン様！ そ、それは人間ではありませんか！ ? い、入れていいのですか？」

ヴァンデモン「そいつは闇の紋章の選ばれし子供だ。バケモン共部屋を案内してやれ。」

バケモン「そ、そのかたが… 分かりました。では闇の紋章の選ばれし子供様。部屋を案内します。」

「俺はそんな長い名前じゃねー。闇斗つづく名前があるんだよ。」

バケモン「すみません。闇斗様。部屋へ案内します。」

この後バケモン達の案内で自分の部屋についた。中は少し薄暗いが城の中よりもまだマシだった。俺はすぐに床に転がり込んだ。久しぶりに安心して休めると思ったからだ。まあ、絶対に安心とは言い切れない気がするが。

ブラック「なあ、闇斗。」

闇斗「ん、どうした? ブラック。」

ブラック「あのさ…」

ブラックが俺に何か言いかけたとき、

ヴァンデモン「闇斗。交渉の内容確認だ。」

闇斗「わかった。わりいブラック。また後でな。」

俺はヴァンデモンによばれついでいった。ついていくと「尋問室」と書かれた部屋についた。…え? 寻問される?

ヴァンデモン「別に尋問はしない。内容確認だけだ。」

うおー? お前人の心読めるのか?

ヴァンデモン「顔でていたぞ。」

…マジ? 俺そんなに分かりやすい?

ヴァンデモン「内容確認だ。私達の仲間になる条件としては「人間への復讐」、「闇の紋章の探索」これでよいか?」

「待て。闇の紋章つてなんだ?」

ヴァンデモン「闇の紋章とはダークネス進化の補助道具だ。これがあれば成熟期以上にも進化が可能になる。あと、貴様の闇の力を制

御しやすくなる。」

なるほど。理解した。でも、条件が少ないなあ。あともう一つくらいい……そうだ！

「ヴァンデモン、話を戻すが交渉の条件にもう一つ付け加えてほしいことがあるんだが。」

「ヴァンデモン」「なんだ？」

「俺をリーダーにした特別部隊をつくる」と。つくれたらそれがの依頼も引き受けよう。どうだ？」

俺の付け加える交渉内容についてヴァンデモンは考えた。その結果、

ヴァンデモン「いいだろ。人員もそちらで選ばせてやる。」

ほつ。なんとか成功した。

「ヴァンデモン」「では交渉内容はこれでよいか？」

「ああ。」

「あ、すまん。」

「ブラック」「別にいいよ。」

俺は交渉を承諾して自分の部屋に戻った。ブラックが床で寝ていた。しかし、扉を開ける音で起きてしまった。

「やつにえはやつをなにを聞いたとしていたんだ？」

俺はさつきなにを聞いたかつたかブラックに訪ねた。

ブラック「あのさ…僕邪魔なんだよね？」

「…は？ なんで？」

ブラック「だつて、闇斗僕と会つたとき俺は一人でいって言つてたじやん。」

ああ、まだあれ気にしていたのか。別にもう気にしなくていいのに。

「最初はそう考えていたけど、あのときにお前がいなかつたら、俺は死んでいた。守つてくれた奴を嫌う理由なんてどこにもないぜ。ましてやこの世界はわからないことだらけだ。また死んでしまう状況になるかもしれない。だから、俺のパートナー『デジモン』になってくれないか。俺はそのほうが助かる。」

ブラック「だًから、闇斗のパートナー『デジモン』なんだって僕。これからもよろしく。」

ブラックがそう言つと俺らはお互ひの手を握りあつた。こうして、俺らの旅は始まるのだった。

交渉（後書き）

闇斗がなぜあのような交渉内容を提示したのか、後の話で明らかになります。

原作開始（前書き）

なんかプロローグみたいになってしまった。

原作開始

S i d e 閻斗

よおー！俺の名前は暗崎闇斗。俺はデジモン事件の次の日にふらつき歩いていると空からブラックデジヴァイスが降ってきた。それを拾うと気がついたら、デジタルワールドに飛ばされていた。そして、俺はそこでブラックアグモンのことブラックとヴァンデモンと会い、ヴァンデモンの城へ住むこととなつた。さあ、ここで俺の仲間と呼べるデジモンを紹介しよう。

まずは俺のパートナーデジモンで素早い動きが得意。ダークネス進化で成熟期のブラックグレイモンまで進化が可能。いざとなると頼れる存在。ブラックアグモンのことブラック。

常に冷静沈着。身軽な動きで敵を翻弄する。チームではお姉さん的存在。猫型デジモンテイルモン。

相手の心が読むことができる。特技は超能力。魔神型デジモンワイザーモン。

相方のパンプモンとともに仲良し。若男みたいなデジモンゴッモン。ゴッモンの相方。「トリックオアトリー」といふ言葉が一番似合うデジモンパンプモン。

この5匹とリーダーである俺と合わせて 俺の部隊は成り立つている。体は子供、頭脳は大人。その名も…

ブラック「なに1人でブツブツ言つてゐるの？」

「驚かすなよ。びっくりしたじゃねーか。」

ブラック「なんかヴァンデモンが呼んでたよ。」

「何？あいつが？」

最近滅多に呼ばれることがなかつたのにな。だるいけど仕方がない。行くか。

ブラック「あ、それと全員でくるなつて言つてた。僕と闇斗だけでこいだつて。」

はあ！？なぜに？いつも全員で行くのに？なんか嫌な予感がしてきたなあ。まあ、行つてみるか。

「どうわけでヴァンデモンの部屋にきたんだが肝心のヴァンデモンがいない。全く呼び出しておいてなんなんだよ。」

「ヴァンデモン」「来たか。闇斗にブラックよ。」

「で、何だよ。なんか俺らだけでやらなければならぬ用なんだろ

？」

ヴァンデモン「流石だな。鋭いぞ。では、用件を言ひついで。よく聞いておれ。」

つたぐ。なんなんだよホント。早く言えよ。

ヴァンデモン「お前たちには人間界に行つてもういい。」

「…………はあ？」

そのときに俺の運命の歯車が動き出した。

原作開始（後書き）

次回はいろいろ説明の回だと思います。

人間界へ（前書き）

短いです。すみません。

人間界へ

前回のあらすじ
突然の辞令。

S i d e闘

い、今こいつなんて言つた？に、人間界に行けとか言わなかつたか。
いや、聞き間違いかもしれん。もう一回聞こう。

「い、今なんつた？」

ヴァンデモン「聞こえなかつたか？人間界に行つてもうつと言つた
のだ。」

……間違いないようだな。しかし、なぜ俺らだけ？人間界を攻める
ならいつきに攻めたほうがいいだろう。

ブラック「どうして僕らだけ？」

まさしく俺がしようとした質問だな。でも、本当になんでだ？

ヴァンデモン「なぜなら……選ばれし子供たちが現れたからだ。」

え？選ばれし子供たち？確かに俺と反対の神聖なデジヴァイスを持
つた子供たちか。

「じゃあ、俺が潰しにいけばいいじゃねーか。」

ヴァンデモン「いや、お前たちは先に人間界に行って調査してもらいたい。」

「調査？なんの調査だ？」

ヴァンデモン「選ばれし子供8人目の調査だ。」

……はあ？さつき選ばれし子供たちが現れたって言ってたじゃねーか。

「8人目？どういうことだ？説明しろ。」

ヴァンデモン「まず選ばれし子供は全員で8人目いるのだが今デジタルワールドに来ている子供たちは7人だ。つまり、あと1人が人間界にいるはずだ。そこでお前たちにはその8人目の調査、デジタルワールドと人間界をつなぐデジタルゲートの設置を頼みたい。よいか？」

なるほど。つまり、俺らで8人目を殺してこいつてことだな。まわりくどくそう言えばいいのに。

ブラック「ちょっと待ってよ。僕らは人間界行くんだよね。デジタルゲートがつながっていないのにどうやって行くのさ？」

あ、ホントだ。気づかなかつた。

ヴァンデモン「つながっているんだが、こちらから一方的にだと2人しか通れないのだ。人間界からもデジタルゲートを開かないといけないんだ。」

へえ～。そうなんだ。だから、俺らだけで行けってことか…。納得。

「じゃあ、ヴァンデモン。俺の仲間を頼んだぞ。もし、殺したりしたら……てめえを殺すから。」

ヴァンデモン「…………いいだろう。それでは準備はいいか？」

ブラック「いいよ。」

人間界か…。行きたくないけどなあ…。

「大丈夫だ。」

ヴァンデモン「それでは行つてくれるん…つてもう入つてるし！」

俺らはデジタルゲートに入つていった。気がついたら、誰もいない路地裏にいた。

人間界へ（後書き）

次回は光ヶ丘でお台場探索の回。

光ケ丘にて（前書き）

超駄文です。お許しを。

光ヶ丘にて

Side闇斗

俺らは無事人間界に着いた。

「さてとまずはお台場という所に行かないとな。」

なぜお台場かと言つと…人間界に行く前のこと…

ヴァンデモン「8人目の子供はおそらくお台場にいるはずだ。まずはお台場という地名を探して向かってくれ。」

「待てよ。探して向かえつてどうこうことだ？それは。」

「行つてみればわかる。あと人間界の金を渡しておこう。」

「俺には必要ないんだが…」

ヴァンデモン「……お前はどうやって人間界で生きていくつもりだ？」

「物をかつさらえば万事解決！」

ヴァンデモン「解決させるな！万事解決じゃなく万事休すの間違いだろ！…いいか、もしそんな事をやって捕まつてみろ。お前の計画も私の計画もパーになるんだ。お前なら脱獄できるが警察が街中に

出回つたら面倒なことになるぞ。だから、人間界の法にふれる」とはするな。」

「…分かつた。だが一つ質問だ。」

ヴァンデモン「何だ？」

「どうやって人間界の金を作つたんだ？」

ヴァンデモン「データ以外になにがある？ データさえあればいくらでも作れる。」

「…………。」

すこい都合主義だなあ。おそろしい。さて、無事人間界に着いたのはいいんだが、

「…………は？」

そう。ここがどこか分からぬ。それと問題がもう一つ。

「…ブラックは？」

辺りを見回したがブラックは見あたらなかつた。迷子かなあ？

ブラック「迷子じゃねーよ！ ブラックデジヴァイスの中だよー！」

あ、そうだった。さつきブラックデジヴァイスに収納したんだった。

…え？ ブラックデジヴァイスにはデジモンを収納する機能ついてい
るの？ 僕だって最初は気づかなかつた。気づいたのは俺が6歳の頃
だ。あると分かつたときにはなんというご都合主義と思つたぞ。さ
てここはなんという地名なんだ？ なんか懐かしい気がするが…

あれから2時間くらい探索した結果3つ分かつことがある。

1・ここは光ヶ丘である

2・食べ物などは金を使って購入する

3・お台場までは電車で行つたほうが便利

まあ、3つ目に関しては当然か…。…え？ 2時間なんでとばしたか
？ そんなん作者に聞け。まあ、どうせ面倒くさいからだろう。それ
と思ったことなんだが高さが高い建物多すぎー自然が全くねーじゃ
ねーか。これだから人間という生き物は…。自分のことしか考えて
ねーな。まあ、とりあえず飯にするか。そちら辺のてきとーな店
にしよう。

店人1「おかえりなさいませ。ご主人様。」

バタンッ

……何だ？今の氣色悪い物体は？吐き気がしたぞ。あんなものまで作り出すのか？（人間です。）み、見なかつたことにしよう。別の所に行こう。お、あそこに24時間営業の店が…。ん？ちょっと待つてよ。24時間つて1日だつたよな。そんならあそこの店の人は無休で働いているのか！なんと非道な…。（闇斗は人間界について全くの無知です。）とりあえず入つてみよう。

店員1 「いらっしゃいませ。」

あ、よかつた。普通の店だ。さて、どんなのを食おうか。つーかここ、なかなかにいろんなものがあるなあ。おにぎりにパン、弁当などバリエーションが豊富だ。（コンビニです。）どれにしようかな？

というわけで腹も満たしたし、お台場に向かおうか。え？なに食べたか？蕎麦にきまつている。しかし、ホントにすこかつたなあ最近のレストランは。（コンビニです。）レストランから歩いて5分「光ヶ丘駅」という所に着いた。電車の乗り方くらいは知つてゐるぞ。切符買えば万事解決だろ！

「しかし……切符どうやって手に入れるんだ？」

俺が切符を買い電車に乗つてお台場に行くのに3時間かかった。

光ヶ丘にて（後書き）

次回はお台場の話です。

お結婚式（前書き）

今回は原作キャラ一人出てきます。

お台場にて

S.i.d.e闇斗

やつとお台場についたぜ。電車の中で吐き気がしてヤバかった。おかげでかなり時間が経つのが長く感じたぜ。ええと……ここで……何すればいいんだっけ？

ブラック「デジタルゲートを繋げると8人目の探索でしょ。しつかりしてよ。」

ああ、そうだった。しかし、デジタルゲート…………どこに作ればいいんだ？光ヶ丘より自然がなく、建物が多いのだが……作るのに適した場所があるのか？まあとりあえず探してみよう。

1時間探索したら人目がないちょうどいい池を見つけた。その真ん中には島みたいなのがある。俺は島みたいな所に移るとブラックをブラックデジヴァイスから出した。

ブラック「久々の外の空氣だあー。」

ブラックが背伸びして言った。

「ブラック、デジタルゲートを繋げるのを手伝ってくれ。一人でもできるがこの後は8人目の探索があるからな。」

ブラック「うん。分かった。」

俺が頼むとブラックはこころよく引き受けてくれた。ちなみに今は午後2時。俺らが人間界に来たのは午前8時くらいだ。

「よし。これで終わり。」

時間について説明しているうちにデジタルゲートを繋げる作業が終わった。

「ブラックありがとう。デジヴァイスに戻つてくれ。」

そう言つとブラックはデジヴァイスに入った。さて、次は8人目の探索か…。どこにいるのだろうか。

や、やべえ。なんか体が黒っぽい物体に襲われている。（ただのガンクロ女です。）なんだ？あれば？女が着てそうな服を持って追

つかけてきやがつた。俺はあんなの断じて着ないからな。つてここどこだ？なんかマンションみたいだな。今はそこにあつたダンボールに身を隠してこむ。どうしてこうなつた？少しふりかえつてみよう。

～30分前～

俺は街中を歩いていた。やはりこゝは不思議に満ちあふれている。なにか小さい四角い箱を耳にあて、1人言をつぶやいている者がいたり（携帯電話です。）「ミミとシンクロしたオッサンがいたり（ただの酔っ払いです。）不思議で溢れている。しかし…

? 「ネ～、ちよつと僕～？」

「あ？」

なんだよ。俺は急いでるんだよ。

? 「ちよつとこの服着てみない？」

「断る。」

? 「～～～～ちよつと着なせこ～～。」「～～～～

気がつくと十数人のガンクローな物体に囲まれていた。…モンスターハウスより恐ろしかった。そして、30分逃げ続け今に至る。あんなの着るなんて冗談じゃない。闇の力で殺つてもいいんだけど……あとで面倒になるんだろうな。

? 「ネエ～。あの子ビーオ～。」

ま、まずい。こ、このままでは見つかるのは時間の問題だ。あれ? ここに扉空いてるだ。よし。一旦この中に避難させてもらおう。

バタンッ!

ふう~。これでもう大丈夫だろ~。

? 「…………あなた、誰?」

俺は突然話しかけられたのでビクツとなってしまった。後ろを振り向くと俺と同じような年齢の女がいた。

バツキューーン

な、なんだこの感情は?なんか胸の鼓動が早くなっている?今までこんなことはなかったはずだ。

「…………暗崎闇斗だ／＼／＼

? 「私はハ神ヒカリ。よろしくね、闇斗くん。」

ヒカリという女がそう言つて微笑みかけたとき俺の胸の鼓動がさらになくなつた。これが8人目との初めての接触だった。

おおむね（後書き）

次回はヒカリとの会話の回になると想こます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367z/>

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

2011年12月25日22時47分発行